

『ガリヴァー旅行記』にみられる日本語地名

中 道 嘉 彦

はじめに

学生の頃『ガリヴァー旅行記』を読んで面白いなと思った。おなじみの「小人の国」の他にも「巨人の国」や「空飛ぶ島」、「馬の国」があるのを知った。「小人の国」までは児童文学の範疇といえそうだが、それ以降は政治、宗教、科学への風刺やら、女性に対する大胆な記述やら、あけすけな露悪趣味やらで、子どもが読むには刺激が強すぎると感じた。

今回読み返してみても興味深く感じたことがある。それは第3篇 *A Voyage to Laputa, Balnibarbi, Luggnagg, Glubbdubdrib, and Japan* (ラピェタ、バルニバービ、ラグナグ、グラブダブドリッブおよび日本渡航記)の後半部分でガリヴァーは何と日本に来ていることを再発見したことだ。彼はおそらく東京湾のどこかに上陸し、そこから江戸に入り、皇帝(=将軍?)に拝謁した。その後、護衛をつけてもらい長崎へ移動、そこからオランダ船に乗って帰国したと書かれている。新鮮な驚きだった。これを何人かの知り合いに伝えると、皆、一様に目を丸くして驚き、関心を示してくれた。誰もが知っている児童文学としての『ガリヴァー旅行記』が日本と接点があると分かると、俄然面白くなる。

再読して不思議に思ったのは、ガリヴァーは長崎から帰国するのだが、長崎が *Nangasac* と記されていることだ。Oxford版には「*Nangasac: Nagasaki*」と注記がある¹⁾。ちなみに中野好夫訳では「ナンガサク(長崎)」、平井正徳訳

では「長崎」のようにルビを振り、野上豊一郎訳には「ナンガサク [長崎]」とある。筆者が抱いた疑問は「ナガサキ」の「ナ」と「ガ」の間になぜ鼻音の「ン」が入り、語尾にあるべき母音の「イ」がないかということである。Oxford版も3つの日本語訳もこの疑問には答えていない。本文中にはNangasac以外の日本語地名と思われるものもあり、さらに第3篇冒頭には日本およびその周辺とおぼしき架空の地図が掲載され、その地図上にも日本語地名らしきものがいくつか見られる。

Nangasacのような地名はエキゾチックな効果を狙ってスウィフトが勝手に作り出したものであろうか、当時の旅行記や地図などを参照したのであろうか。またそれらの日本語らしき地名はある程度、当時の日本語発音を反映しているのであろうか。まず本文に現れる日本語地名から検討し、次いで第3篇冒頭の地図に見られる日本語地名を調べてみたい。

なお本論で古地図に言及するが、そのうちの幾つかは筆者が古書店で買い求めたものだが、もちろん複製品である。「オルテリウス 鞆鞆日本図 1595」、「バルチウス アジア図 1610」、「サンソン アジア図 1650」、「デ・ウィット 世界図 1680」、「ブリエ 日本図 1710」と表記する。また『ガリヴァー旅行記』の英文は Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*. Ed. with an introduction by Claude Rawson and notes by Ian Higgins, Oxford University Press, 2005 から引用し、訳文は中野好夫氏による『ガリヴァー旅行記』(新潮社、1951)のものを使わせていただいた。

本文に見られる日本語地名

本文には Xamoschi なる港町と Yedo、それに Nangasac の3つの日本語地名が登場する。以下、それぞれについての考察を記す。

・ Xamoschi

ラグナグ(Luggnagg)から日本行きの船に乗って、ガリヴァーは Xamoschi という日本の東南部にある港町に上陸したことになる。1709年5月6日にラグナグ国王に別れを告げ、ラグナグ島の港に6日間滞在、航海に15日かかったとあるので、Xamoschi には同年5月27日に着いた計算になる。

We landed at a small Port-Town called *Xamoschi*, situated on the South-East Part of Japan. The Town lies on the Western Part, where there is a narrow Streight, leading Northward into a long Arm of the Sea, upon the North-West Part of which, *Yedo* the Metropolis stands. (p. 201)

(われわれは日本の東南部にあるザモスキと呼ぶ小さな港町に上陸した。町は、狭い海峡が北の方へ向ってちょうど長い腕のように伸びている、その西端にあるわけだが、さらにその腕の北西部にあたるところに首都のエド(江戸)があった。279頁)

Xamoschi は日本の東南部(おそらく現在の関東地方)にあり、狭い海峡(おそらく浦賀水道)の西側にあり、その海峡が北へ向って伸びる長い腕(おそらく東京湾)の北西部に江戸があった、と読めるであろう。そうすると *Xamoschi* は神奈川県のあるところの地名ということになる。横須賀市では観音崎こそガリヴァーの上陸地であるとして、「観音崎フェスタ」なるものを開催し、町おこしをはかっている。*Xamoschi* と *Kannonsaki* の綴りが似ている (*Xa=Ka, mo=nnō, schi=saki*) というのが根拠のようだ²⁾。2009年 はガリヴァー上陸からちょうど300年目にあたり、現地ではおおいに盛り上がったようである。詳しくは「ガリバー上陸300年」で検索すると色々な情報を得ることができる。横須賀がある三浦半島は *William Adams (1564-1620)* や *Matthew C. Perry (1794-1858)* など著名外国人ゆかりの地だが、それにガリヴァーが加わると、その意気はいやがおうでも盛んになるだろう。

Xamoschi は神奈川県ではなく千葉県側にあり、とする説もある。いかにもスウィフトらしい「言葉遊び」に基づいた説である。まず発音だが *Xamoschi* は全ての訳者が「ザモスキ」と記している。英語読みすると得られる発音である。*Xa*-は *Xavier* のように [zæ]、2番目の音節-*mo*-はおそらく二重母音化して [mou]、最後の音節-*schi* は *school* や *schedule*などを参考にする と [ski(:)] となる。強勢と母音縮約を加えると全体で [zəməuski(:)] となるだろう。ただ-*sch* の発音は *schedule* の英国発音のように [ʃ] となる場合もあるので [zəməuʃi(:)] かもしれない。何人かの英語話者に聞いてみると「ザモ(ー)シ」「サモ(ー)シ」の可能性もあるようだ。

千葉県はその昔、南部の安房、中部の上総、北部の下総の3つの地域から

なっていた。しかし、そのいずれにもザモスキ、ないしそれに類似した港町は見当たらない。*Notes and Queries* (February, 1983) に掲載された Shimada 氏の論文を紹介すると、Xamoschi は千葉県の旧名の1つ、下総(しもうさ)のアナグラムだそうだ。下総は shi、mo、sa のように3つの音節に分けることができる。最初と最後の音節を入れ替えると sa、mo、shi が得られる。下総は Sanson の地図(1652年、1669年)にはポルトガル語で Ximoja と綴られている。Herman Moll の地図(1712年)も同様。Bernardino Ginnarro の地図(1641年)にはイタリア語で Scimosa とあるそうだ。これらの事実とガリヴァーの上陸地と江戸との位置関係を総合して Xamoschi は下総(「しもうさ」、または「しもーさ」)³⁾のアナグラムだと結論づけている。

Shimada の説はとても魅力的だが、いくつか補足したい。まずポルトガル語の綴り Ximoja だが、最後から2つ目の文字‘j’はロング・エス(古い文献には‘f’に似た文字で登場する)ではないだろうか。‘j’は発音記号としては用いるが、通常の綴りには使用されない。もし‘j’がロング・エスなら Ximoja は無理なく「しもさ」と読める。次に Xamoschi がポルトガル語綴りを反映しているとすれば第2音節までは「シャモ」となるはず。アナグラム化する前の全体の形は「シモシャ」あるいは「スキモシャ」であったはずだ。また「スキ」のポルトガル語綴りは s(u)qui であって schi ではない。Schi を「スキ」と読むのは英語あるいはイタリア語であろう。それでも Shimada のアナグラム説は説得力がある。「巨人の国(Brobdingnag)」は England を、Balnibarbi 国の首都 Lagado は London をアナグラム化して作ったとされる⁴⁾スウィフトなら、同じ方法で下総から Xamoschi を造語したことは十分に考えられる。ガリヴァーの上陸地がかりに下総とすれば、千葉県に住む筆者としてはガリヴァーに対して多に親近感を抱くのだが…⁵⁾。

Xamoschi が神奈川県か千葉県のどちらの側にあるのか、という2つの説が生じる原因は原文が極めて曖昧だからである。“The Town (=Xamoschi) lies on the Western Part,”とあるが「何の Western Part」なのかが問題なのである。前文にある“South-East part of Japan”、つまり「関東」の西側と解釈すればかなり広い地域を指すことになる。狭く解釈して「房総半島」の西側にあり、下総をアナグラム化したものとする、つまり千葉市や船橋市あたりという解釈が成り立つかもしれない。この「何」が“a narrow Streight”、つまり海だとすれば Xamoschi は横須賀市や横浜市あたりということになるだろう。

・ Yedo

ガリヴァーは Xamoschi から当時の首府、Yedo に入り、皇帝 (=将軍?) に拝謁したようだ。これはもちろん東京の旧名「江戸」のことで、徳川幕府の所在地。現在では「エド」と発音するが、当時の発音には語頭に半母音の [j] が入っている。他に Yechijen (越前)、Yecchū (越中)、Yechigo (越後) などの国名にも語頭に [j] が見られる⁹⁾。また「ブリエ 日本図 1710」には YENDO という綴りがある。D の前に N が入る現象は後述する。

・ Nangasac

江戸時代、ヨーロッパと唯一の窓口である出島のあった長崎のことを指しているのは間違いないだろう。江戸で将軍との拝謁を許されたガリヴァーは護衛をつけてもらい長崎へ移動、そこからオランダ船に乗って帰国した。江戸で尋問された際、彼は通訳に次のように答えている。

I answered, (as I had before determined) that I was a *Dutch* Merchant, shipwrecked in a very remote Country, from whence I travelled by Sea and Land to *Luggnagg*, and then took Shipping for *Japan*, where I knew my Countrymen often traded, and with some of these I hoped to get an Opportunity of returning into *Europe*: I therefore most humbly entreated his Royal Favour to give Order, that I should be conducted in Safety to *Nangasac*. (p. 202)

(そこで我輩は(むろん、前からちゃんとそのつもりではいたのだが)、実は自分は遠い遠い世界の果てで難破したオランダ商人だが、それから海山を経て、どうやらラグナグまではやって来た、それからさらに船に乗ってこの日本へやって来たのだが、つまりこの国とは、わが同胞たちがしばしば貿易をしていることを知っていたので、もしかすると誰か彼らと一緒にヨーロッパへ帰る機会もあろうかと思ったのだ、だから仰ぎ願わくはナンガサク(長崎)まで無事に送り届けていただきたい、と答えてやった。280 頁)

現在、長崎は「ナガサキ」と発音されるが、当時は「ナンガサク」や「ナ

ンガサキ」もあつたのだろうか。まず長崎をいくつかの文献(主に宣教師が残した資料)と古地図で拾ってみる。ロドリゲスの『日本大文典』には以下のような例がある。

「○固有名詞は固有にして特定の又は限定された事物を意味するものである。例へば, Xintarö (真太郎), Nippon (日本), Sacai (堺), Nagasaqui (長崎)。236 頁」

「○郷土名詞は Romano 等のやうに、郷土を示すものである。日本人は郷土を表す語に Xü (衆), 又は Iin (人), 又は Mono (者) を添へる。例へば, Miacoxü (都衆), Sacai xü (堺衆), Romajin (ローマ人), Nagasaquino mono (長崎の者), 等。259 頁」

「例へば, Nagasaquito yarani tçuita (長崎とやらに着いた), など。494 頁」

「Nagasaquino Padre Reitor sonrö, l, sama (長崎の伴天連れいとる〔学林長〕尊老, 又は, 様)。717 頁」

「姓氏の‘名字’(MIÖII)に就いて … Tacayamadono (高山殿), Nagasaquidono (長崎殿), Arimadono (有馬殿), など。757 頁」

これらロドリゲスがあげている例を見る限り、全て「ナガサキ」のようである。しかし同書扉の下部には「ナンガサキ」がある。

COM LICENÇA DO ORDI- / NARIO, E SVPERIORES EM / Nangasaqui
no Collegio de Iapão da / Companhia de IESV / Anno. 1604.

(司教並に長老の允許を得て / 日本耶蘇会のコレヂョ / 長崎に於いて / 1604 年)

同じように『日葡辞書』(1603)の扉下部にも「ナンガサキ」との表記がある。

COM LICENÇA DO ORDINARIO, / & Superiores em Nangasaqui no
Collegio de Ia- / PAM DA COMPANHIA DE IESVS. / ANNO M.D.C.III.

(教区司教ならびに上長たちの許可 / のもとに, 日本イエズス会の / 長崎

コレジオにおいて / 1603 年)

『コリヤード日本文典』(1632)には以下の3つがあるが、鼻音が入る例と入らない例が見られる。

「Pedro toj uanto Nagasaqi ie ita (ペトロとジュアンと長崎へ行た), …
Pedro mo juan mo Nāgasaqi càra mōdotta (ペトロもジュアンも長崎から
戻った), 91 頁」

「Pedro ua Nagasaqi de xutrai xita iqi iqi nitquite juan wo coroita (ペトロは長
崎で出来したいきいきに就いてジュアンを殺いた)。94 頁」

1つ目の例は「ナガサキ」だが、2つ目は g の前の母音 a の上にティルデ(~)
が付されているので「ナンガサキ」と発音していたと思われる。3つ目の例
は「ナガサキン」かもしれないが、単にティルデの位置を間違えた印刷ミス
の可能性もある。コリヤードによれば、ナとガの間に鼻音が入るのと入らな
い両方の発音があったことになる。ついでながら2つ目の例文で mōdotta は
ティルデが存在することから、その発音は「もんどった」かもしれない。D
の前に n が入る例であろう。

次の例は孫引きで恥ずかしいが、Oxford 版 *Gulliver's Travels* の註でみつけ
た。Awnsham と John Churchill 共著の *A Collection of Voyages and Travels* (London,
1704) に収められた John Francis Gemelli Careri による “A Voyage Round the
World” という文章に「ナンガサキ」があるとのことだ。

“That the Christians might have no Opportunity of getting in under the
name of other Nations, [the Japanese] were advis'd by the *Dutch*, who
will have all the Profit to themselves, to lay a Crucifix on the Ground at
the Landing Place, to discover whether any Christian comes under a
Disguise, because any such will refuse, or at least make a difficulty to
trample on the Crucifix to enter Nangasache, the Port of *Japan*.” (p. 339)

「踏み絵」について書いたこの箇所に出てくる *Nangasache* は「ナンガサキ」
と発音されていたかもしれない。語尾の -e は英語では通常「イー」のよう

に長音になるか、「エイ」のように二重母音になる。ローマ字式に「ナンガサケ」とはならないだろう。

時代は下がって19世紀半ば、来日経験はなく、当時ヨーロッパに派遣された幕府の使節や留学生との接触を通して日本語研究をすすめたオランダ人ホフマン(J.J. Hoffmann, 1805-1878)の著書、*A Japanese Grammar* (Leiden, 1868)には、江戸ではガ行鼻濁音をもって「ナンガサキ」と発音されるが、ローマ字表記としてはnなしのgを採用しNagasakiと書く、と述べている箇所がある。

Therefore without wishing to dispute the freedom of others to write *wanga* for ワガ and *Nangasaki* for ナガサキ, because people in *Yédo* speak so, we adhere to our already adopted written form *waga* and *Nágasáki*, and say *wánga* and *Nángasaki*.⁷⁾

次に手元にある古地図に見える地名を調べると「長崎」を載せているのはNangasaki「サンソン アジア図 1650」、Nangazachi「ブリエ 日本図 1710」の2点である。サンソンもブリエも鼻音の入った形を採用している。ブリエはNangazachiと綴るが「ナンガサキ」ではなく「ナンガザキ」と濁音で発音したのであろうか、それとも単に先行する地図の綴りを踏襲してものであろうか。ブリエの地図では大阪もOzacaと綴られている。

長崎を『日本国語大辞典』で引くと「ナガサキ」という発音に関する註記がある。「ガ」は鼻濁音[ŋ]を表すので、欧米人がそれを聞けば-ng-で表記しても不思議はないかもしれない。おそらく多くの現代日本人は筆者も含めて「ナガサキ」の「ガ」を鼻濁音だと意識していないのではないか。だからNangasakiなどのようにnが入った表記を見るとなおさら違和感を覚えるのかもしれない。

最後にNangasacの語尾の母音「イ」が落ちているのは何故であろうか。スウィフトが参照した地図などの文献に語尾の母音が欠けていたのか、語尾の母音を落として閉音節を作りわざと英語らしくしたのか、あるいは次の引用にあるように、ガリヴァー本人が日本語に対して無学だったので語尾を聞き落としてしまったのか、正確なところはわからない。

... ; but my Stay in *Japan* was so short, and I was so entirely a Stranger to the Language, that I was not qualified to make any Enquiries. (p. 201)

(だがなにしろ我輩の日本滞在がひどく短かったうえに、その言葉に対してもまったく無学ときている、だから質問をするにもそれさえできなかった。 278 頁)

第3篇冒頭の地図に見られる日本語地名

第3篇の冒頭には *Laputa* (空飛ぶ島) をはじめとするいくつかの架空の島と日本とおぼしき地図が掲載されている。欧米系の地名や意味不明の地名もあるが、それらは今回の考察対象とはしない。

本文の中に1カ所だけ、当時の地図への言及がある。第2篇第2章最後にガリヴァーの個人教師をつとめたグラムダルクリッチ (*Glumdalclitch*) がサンソンの地図書よりやや大きめの小型本をポケットに入れていた、とある。

She carried a little Book in her Pocket, not much larger than a *Sanson's Atlas*; it was a common Treatise for the use of young Girls, giving a short Account of their Religion; out of this she taught me my Letters, and interpreted the Words. (p. 90)

(彼女はいつもサンソン氏地図書をやや大きくしたくらいの小冊子をポケットに入れていた。これは若い娘たちに読ませる、この国の宗教のことを簡単に書いた通俗書なのだが、この本を使って彼女は我輩に文字を教えたり、言葉を説明したりした。122 頁)

Sanson's Atlas がどのような地図であるのか、筆者は確認していない。サンソン (Nicolas Sanson, 1600-67) はフランスの地図製作者で、その地図は英国でも広く使われていたようだ。ここからは推測になるが、作者のスウィフトはサンソンの地図を見ていたかもしれない。本文では英語式綴り *Japan* を用いているが、第3篇冒頭の地図ではフランス語の *JAPON* を採用している。これはスウィフトが彼のフランス語地図を見ていたことの傍証となるかもしれない。

それでは最初に地図を掲載し、その日本語地名を北から時計回りに検討していくことにする。

日本および周辺地図⁸⁾

・ LAND OF IESSO

地図中央の左側に不釣り合いなほど大きく描かれている島が、蝦夷地、即ち現在の北海道であろう。この地図を右側に90度回転させてほしい。北海道に見えてこないだろうか？ちょうど Salmon B (ay)⁹⁾が噴火湾(内浦湾)に相当するように見えるが、いかがであろうか？「ブリエ 日本図 1710」には北海道南端が顔をのぞかせ TERRE DE IESSO とある。この IESSO はロドリゲスの『日本大文典』には Yezo の綴りで現れる。

「その時代の少し前に、日本は、ある歴史家達が言っているやうに、支那か、朝鮮か、一部は‘蝦夷’(Yezo)か、又はこれらあらゆる地方からか植民したと思はれる。832 頁」

「支那人がその歴史で言っているのによると、これより少し前に、支那から日本へ‘舟’(Funes)によって移住が始まったやうであり、又‘高麗’(Cōrai)や‘蝦夷’(Yezo)方面からの移住も、同様に彼等の歴史の上から推論し得るやうである。845 頁」

「エド」がかつて語頭に半母音の[j]を持っていたやうに「エゾ」も[j]から始まっていた。それが Iesso や Yezo の綴りで表記された。

・ Boshō Pt.

新潮社版の『ガリヴァー旅行記』(p. 194)には「バシヨ一港」とあるがこれでは意味がわからない。母音は2つともあきらかに o なので「ボ(一)シヨ(一)」としか読めない。これに近い地名は「ボウシュウ(房州)」であろう。ロドリゲス『日本大文典』(752 頁)には「Aua(安房)‘唐名’(Carana)。Bōxū(房州)」とある。「房総」かとも考えられるがこちらは比較的新しく、「房州」という呼び名は少なくとも天正年間(1573-92)までさかのぼれるやうだ¹⁰⁾。

・ Iedo

江戸のこと。本文では Yedo という形で出てくるが地図上では Iedo。現在は「エド」であるが語頭に半母音の[j]が入るのが当時の発音のやうだ。蝦夷「エゾ」も Iesso や Yezo などと綴られた。「ブリエ 日本図 1710」には YENDO とある。

・ **Surunge**

語尾の母音が不明瞭。Surunga あるいは Surunge と読めるが、現在の静岡県の一部を成す旧国名、駿河を指す地名であろう。G の前に n が入って鼻濁音化するのには Nangasac と同じ。古地図には Suruga「ベルチウス アジア図 1610」、SURUNGA「ブリエ 日本図 1710」とある。

・ **Tonsa I.**

位置から考えて土佐と思われる。I は Island「島」を表し、全体で「土佐島」だが、もちろん四国の一部である土佐の国を指す。他の古地図にも TONSA「オルテリウス 鞆鞆日本図 1595」、Tonsa「ベルチウス アジア図 1610」、Tonsa「サンソン アジア図 1650」、Tonsa「デ・ウィット 世界図 1680」とある。「ブリエ 日本図 1710」は Tosa。S の前に n が入る現象は後で述べる。

・ **Bungo I.**

「豊後島」であるが九州にある旧国名、豊後を指すと思われる。手元の古地図では BVNGO「オルテリウス 鞆鞆日本図 1595」、Bugo「ベルチウス アジア図 1610」(四国と九州の間には大きく「Bungo」とある)、「サンソン アジア図 1650」、Bungo「ブリエ 日本図 1710」となっている。

・ **I. Tanaxima**

種子島か? ポルトガル語だと「タナシマ」と読める。古地図でそれらしき島を探すと Taxuma「オルテリウス 鞆鞆日本図 1595」、Tuaxuma「ベルチウス アジア図 1610」、Tanegaxima I「ブリエ 日本図 1710」がある。

・ **Osacca**

大阪と思われる。古地図では Ozaca「ブリエ 日本図 1710」とある。ブリエの Ozaca は中世後期の発音が反映されているようである¹¹⁾。

・ **Meaco**

都、すなわち京都を指す。古地図には Meaco「オルテリウス 鞆鞆日本図

1595]、Meaco「ベルチウス アジア図 1610」、Meaco「サンソン アジア図 1650」、Meaco「ブリエ 日本図 1710」とある。ロドリゲス『日本大文典』には「Miacoxu(都衆)。10頁」、「例へば、Miyacoye muquete noboru。(都へ向けて上る。) 287頁」、「Miacoyori。(都より。) 338頁」などとある。

・ Inaba

因幡の国を指す。古地図には Inaba「ブリエ 日本図 1710」とある。

・ Sando I.

佐渡を指す。古地図には Sando「ベルチウス アジア図 1610」、Sando「サンソン アジア図 1650」、Sando「ブリエ 日本図 1710」とある。Dの前に n が入るのは後で述べる。ロドリゲス『日本大文典』では「Sado(佐渡)。753頁」。

同器官的な鼻音挿入

以上が『ガリヴァー旅行記』の本文および第3篇冒頭の地図に見られる日本語地名である。現在の発音から考えて首を傾げたくなるもの、不思議に思われる地名がいくつかある。それを解明してくれるヒントの1つがロドリゲス『日本大文典』にある次の記述である。

D, Dz, G の前の母音に関する第三則

○D, Dz, G の前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソンスネーテかを伴ってゐるやうに発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持ってゐる発音なのである。例へば、Māda(未だ)、Mídō(御堂)、mádoi(惑ひ)、nādame(宥め)、nādete(撫でて)、nído(二度)、māzdu(先づ)、āgiuai(味はひ)、águru(上ぐる)、ágaqu(足掻く)、cága(加賀)、fanafáda(甚だ)、fágama(羽釜)、など。¹²⁾

要するにこれは(1)母音+[d]、(2)母音+[dz]、(3)母音+[g]の環境で母音と後続する子音の間にその子音と同器官的な鼻音が挿入されることを意味する。すなわち母音+[d]の場合には[n]、母音+[dz]の場合も[n] (以上は歯茎

鼻音)、母音+[g]の場合は[ŋ](軟口蓋鼻音)が挿入され、ロドリゲスの例では *Māda* (未だ) が [manda]、*mādzu* (先づ) が [mandzu]、*cága* (加賀) が [kanga] のように発音されていたことになる。それらをローマ字で表記すれば *manda*、*mandzu*、*canga* あるいは *kanga* となるだろう。方言にはしばしば古い語形が保持されており、東北地方では今でも「未だ」が「まんだ」、「先づ」が「まんず」などと聞かれる場合があるが、これらはまさしく[d]や[dz]のような歯茎音の前に同じ発音器官、即ち歯茎を使う鼻音[n]が挿入される例である。Gの前にnが挿入されるのも同じ現象で、発音記号で表記すると[-ŋg]となる。「ブリエ 日本図 1710」やその他の資料からこれら3つの範疇にあてはまる地名の例を拾ってみる。いずれの場合も綴りの上ではnが挿入される。

(1) 母音+[d]の場合は[n]が入る

YENDO (エド)、*Ondaaura* (小田原)、*Sando* (佐渡)、*FINDA* (飛騨)、*FIRANDO* (平戸)。

(2) 母音+[dz]の場合も[n]が入る

Canzula (上総)、*CONZUQUE* (上野)。他の例としては松田毅一/E・ヨリッセン著『フロイスの日本覚書』(191頁)に「盃(*sacanzzuqi*)」がある。またルイス・フロイス著『ヨーロッパ文化と日本文化』の序文(13頁)に「加津佐 *Canzusa* に於て執筆」とあるが、これらも(2)母音+[dz]の例に加えられよう。

(3) 母音+[g]の場合は[ŋ]が入る

Sangami (相模)、*SURUNGA* (駿河)、*Yechingo* (越後)、*CANGA* (加賀)、*Inga* (伊賀)、*NANGATO* (長門)、*Yamanguchi* (山口)、*Chicungo* (筑後)、*Nangazachi* (長崎)、*FINGO* (肥後)、*FIUNGA* (日向)、*Cangoxima* (鹿児島)。

普通名詞の例としては松田毅一/E・ヨリッセン著『フロイスの日本覚書』、188頁に「長刀(*nanguinata*)」、192頁に「小刀(*congatana*)」がある。

上記(1)と(2)の規則を補強するのがホフマンの説である。それを引用している松村の説明とあわせて引用する。

ダ行音については、次のように記している。

ダ, ギ, ツ, デ, ド, *da, dzi, dzu, de, do*, according to the dialect of *Yédo*
nda, ndzi, ndzu, nde, ndo ...

すなわち、「ダ・ヂ・ツ・デ・ド」は *nda, ndzi, ndzu, nde, ndo* だということである。ダ行音はいずれも鼻音化しているということであるが、この点

についても、これはホフマン独自の観察で、他の欧米人の記述にもダ行音が鼻音化するということは、ほとんど見られないようである。¹³⁾

さらに次の規則も加えることが出来よう。

(4) 母音+[s]の場合は[n]が入る

ガリヴァーの地図や古地図の多くに土佐がTonsaと表記されているのは(4)の規則で説明がつかさう¹⁴⁾。[s]も歯茎音なのでその前に同じ歯茎の鼻音、即ち[n]が入るわけである。

おわりに

長崎がなぜNangasacと表記されているのかという疑問から出発し、宣教師たちが残した資料や古地図を調べていくうちに、江戸時代の日本語では広く鼻音化が行われていたことが分かった。鼻音化する際の音韻規則は歯茎で調音される破裂音や破擦音、あるいは摩擦音の前に同器官的な鼻音である[n]が入るというものである。また軟口蓋破裂音[g]の前にも同器官的な鼻音[ŋ]が入り、綴りとしては-ng-となり、これがまさにNangasacという表記に対する疑問への答えであった。

本論では限られた資料に基づいて論を進めたきらいがある。特に日本人が残した資料には当たらなかったし、古地図には未見のものが数多くある。キリシタン資料も決して十分とは言えない。このような欠点を補うべく、次回は資料をもっと充実させて調べて見たいものである。

註

- 1) Swift, J. *Gulliver's Travels*. (Oxford University Press, 2005), p. 339.
- 2) スウィフトは当時の地図も参照しながら、該当箇所を執筆したと思われる。ヨーロッパ人が当時見ることができた日本地図といえば、現在の北海道が記されていない、など極めて不正確なもの。「ブリエ 日本図 1710」には旧国名や江戸、大阪など大都市名は見られるものの、観音崎のような小さな地名は載っていない。スウィフトが見たかもしれない地図に、観音崎

が載っており、それを加工して Xamoschi を作りあげた、とする説は多少無理があるように思われる。

- 3) 筆者の手元にある「ブリエ 日本図 1710」には XIMOLA とあり、これは「しもさ」と読める。-LA がおかしいと思うかもしれないが、これは小文字のロング・エスをエルと誤解し、それを大文字に直したものであろう。同地図では「武蔵」が MULAXI、「美作」が MIMALACA と表記されている。本論 109 頁の「Canzula (上総)」も同様。
- 4) “A GULLIVER DICTIONARY”, pp. 611-613.
- 5) Krupa の論文 (p. 116) に “Somewhat problematic is the identification of Xamoschi. The ship from Luggnagg brought Gulliver to this small port on the south-east part of Japan across the bay, opposite Yedo. Despite the misleading transcription (*x* points out to Portuguese mediation while *sch* betrays German filter) it might be the town of Samōshi in the Chiba prefecture east of Tokyo, at the western shore of a long promontory barring the bay of Tokyo from the Pacific.” とある。嬉しいことにこの論文は Xamoschi 千葉県説だが、千葉県には Samōshi なる地名が見つからない。Krupa は 1983 年の Shimada 論文を読んで、Xamoschi は下総のアナグラムであるとの説を知っていたかもしれないが、それについての言及はない。
- 6) ロドリゲス『日本大文典』753 頁。
- 7) 松村明『洋学資料と近代日本語の研究』436 頁。
- 8) 版によっては文字が読みづらいものがある。ここに掲載したのは文字がもっとも明瞭な地図で Britannica 版 *Swift / Sterne* (p. 90) から採った。
- 9) 新潮社版の『ガリヴァ旅行記』(p. 194) には「サラモン湾」とあるが、正しくは「サーモン(鮭)湾」ではないだろうか。
- 10) 『日本国語大辞典』の「房州」を参照。
- 11) ロドリゲス『日本大文典』(690 頁) には「大阪 (Vōzaca)」とある。また『日本地名大百科』(196 頁) には「古代には難波、中世後期には大坂、小坂、尾坂と書かれて「おさか」「おざか」とよばれたが、近世には大坂の地名が定着して「おおさか」となり、明治以降に大阪の用字に統一された。」とあり、濁音が一般的だった可能性がある。
- 12) ロドリゲス『日本大文典』637 頁。
- 13) 松村明『洋学資料と近代日本語の研究』439 頁。

- 14) TONSA 「オルテリウス 韃靼日本図 1595」、Tonsa 「ベルチウス アジア図 1610」、Tonsa 「サンソン アジア図 1650」、Tonsa 「デ・ウィット 世界図 1680」。ただ「ブリエ 日本図 1710」では若狭は VACASA と表記され VACANSA とはなっていない。これは例外であろうか？

参考文献と資料

(英語版と翻訳)

Swift, J. *Gulliver's Travels*. Ed. with an Introduction by Claude Rawson and Notes by Ian Higgins, Oxford University Press, 2005.

Swift / Sterne (Great Books of the Western World, 36). Ed. by Robert Maynard Hutchins, Encyclopaedia Britannica, Inc., 1952.

スウィフト作／平井正穂訳『ガリヴァー旅行記』岩波書店 1980

スウィフト／中野好夫訳『ガリヴァ旅行記』新潮社 1951

スウィフト作／野上豊一郎譯『ガリヴァの航海』岩波書店 1941

(学術文献)

秋庭隆編集著作『日本地名大百科』小学館 1996

Clark, P. O. "A GULLIVER DICTIONARY". *Studies in Philology*, 50 (1953), 592-624.

コリヤード, ディエゴ著、大塚高信訳『コリヤード日本文典』風間書房 1957

土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店 1980

福島邦道著『キリシタン資料と国語研究』笠間書院 1973

_____『続キリシタン資料と国語研究』笠間書院 1983

フロイス, ルイス著、岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店 1991

Krupa, Viktor. "THE ISLAND OF IMMORTALS, JAPAN AND JONATHAN SWIFT". *ASIAN AND AFRICAN STUDIES*, 7, 1998, 2, 113-117.

松田毅一／E・ヨリッセン著『フロイスの日本覚書』中央公論社 1983

松村明著『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂出版 1970

日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』小学館 1972

ロドリゲス, ジョアン原著、土井忠生訳註『日本大文典』三省堂出版 1955

佐藤武義編著『概説日本語の歴史』朝倉書店 1995

Shimada, Takau. “Xamoschi Where Gulliver Landed”. *N & Q* NS 30 (1983), 33.

(古地図)

TARTARIAE SIVE MAGNI CHAMI REGNI (Orterius, 1595) 「オルテリウス 韃靼日本図 1595」

CARTE DE L'ASIE (Bertius, 1610) 「ベルチウス アジア図 1610」

ASIE (Sanson, 1650) 「サンソン アジア図 1650」

ATLAS (Frederick De Wit, 1680) 「デ・ウィット 世界図 1680」

ROYAUME DU IAPON (Briet, 1710) 「ブリエ 日本図 1710」